

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

国立民族学博物館：
アフリカに関する博物館活動から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005863

国立民族学博物館

－アフリカに関する博物館活動から－

池谷和信（国立民族学博物館，民族社会研究部）

1. はじめに

国立民族学博物館（以下、みんぱくと略する）は、世界の諸民族の社会と文化について研究し、その成果を展示する研究博物館である（国立民族学博物館編，1998）。みんぱくは、1974年6月に、日本で初めての民族学の研究センターとして及び世界の諸民族の文化を展示する博物館として、大阪北部の万博公園内に設立された。これ以降、みんぱくでは、研究活動と博物館活動の両者の両立をめざして、様々な成果が蓄積されてきている。アフリカ研究においては、アフリカの諸民族（サハラ以南のアフリカに限定）をめぐる国際シンポジウムや研究報告書が知られる一方で、アフリカ地域に関わる博物館活動についてはあまり知られてこなかった。

以下では、筆者がこの博物館に赴任した1995年8月から現在までの約4年半にわたる経験をもとに、みんぱく内のアフリカ地域を対象にした博物館活動を紹介する。具体的には、1997年12月の筆者による標本収集、1997年の新着展示、1999年2月から3月までの映像収集、1999年9月から2000年1月にかけての特別展示にかかわった際の事例にもとづいている。これらの諸活動は、みんぱくのアフリカ常設展示に欠けていた南部アフリカ地域（南アフリカ、ボツワナ、ナミビア、レソト、スワジランド、モザンビーク）の物を対象にしてきた点では共通しており、標本や映像の収集段階と、それらを使つての展示による公開という2つのプロセスから構成されている。

2. 収集

収集は、標本収集と映像取材とに2分される。標本収集とは、一般に物の収集を示すが、写真、古地図、絵はがき、銅版画などのそれも含まれている。映像取材は、ビデオテープに使われる民族誌映像の取材である。両者とも、毎年、みんぱくの館員からの申請がつけられ、委員会の審査のもとで担当者が決められている。

(1) 標本収集

みんぱくでの標本収集は、自らの研究を押しすすめるために実施される必要がある。しかし、館内において、収集のマニュアルはみられない。南部アフリカで何を収集できるのか、何を収集したら展示できるのかはまったく見当がつかない。そこで、まず、南部アフリカの各地の博物館と美術館をまわり、何が展示されているのか、どういう図録が刊行されてきたのかを調査した。

その結果、展示物の背景には博物館とつながりの深い収集家がいること、また彼らが現地に行くこともあるが、現地には別の収集家がいることがわかり、筆者も彼らに接して物を購入する一方で、できる限り現地を広くまわる計画を立てた。

その結果、筆者の研究テーマに沿って、収集品が3つに分類された。まず筆者は、南部アフリカにおける諸民族の交易の歴史研究を深めるために、ガラス製のビーズ細工に興味を持っていた。つまり、南部アフリカが世界最大のガラスビーズの消費地であると聞いており、各地の文化のなかにビーズ細工がどのように根づいているのかが関心事であった。これらを収集するうえで、ガラスビーズのみならず鉄製ビーズやダチョウの卵殻製のビーズなどに対象を拡大していった。しかし、現地を広くまわってみると、レソトやスワジランドでビーズ細工を見つけることは困難であった。南アフリカにおいても、一部のおみやげ品を除いて現地では急速に使用されなくなってきている。このため、ズールーやコーサのビーズ細工を収集家から購入した。

次に、カラハリ砂漠のサン（ブッシュマン）研究の立場から、近年になって彼らのなかからアーティストが生まれ、彼らの作品が世界の博物館や美術館で展示されている動向をふまえて、彼らの絵画や版画を収集した。これらは、アフリカ地域のみならず、世界の先住民のなかで共通にみられるグローバル化するアートの動向と期を一にしているものである。

最後は、カリブ海の一部の地域を除いてアフリカ内にもみられる親指ピアノという楽器の収集に努めた。筆者は、これらと地域社会とのかかわりあい把握することは、アフリカ人の共通の心性を探ることになると考えている。良質の古いタイプの物が、リスボンの国立民族学博物館やシカゴの自然史博物館の収蔵庫に所蔵されていることを確認したが、現在、それらを収集することはできない。一部は、収集家から購入できた。そこで、展示場での物の並べ方を工夫したり、演奏している映像を併用することなどをおして、筆者の研究成果を表現するよう試みた（写真1）。



写真1 カラハリ砂漠のアーティスト展示のようすー親指ピアノのコーナーからー来館者が、数種類の親指ピアノにふれて、音をだせるようになっている。

(2) 映像取材

みんなくでの映像取材もまた、自らの研究を押し進めるために実施される必要がある。筆者は、1999年2-3月に、ボツワナの村と南アフリカの都市において実施した。ボツワナでは、カラハリ砂漠におけるスイカ利用の変化などから狩猟採集民サンの変わりつつある生活を撮影した。南アフリカでは、これまでのみんなくの映像取材において欠けていた都市スラムの生活に焦点を当てた。

ボツワナでは、サンのなかでのスイカの利用、ヤギと人との共生のあり方、家づくりなどをテーマにすることができた伝統的な村と、学校や診療所などが整備され移住者で構成された新しい村との比較を念頭におきながら、各々の村での撮影を実施した。筆者は、これらの地域において10年以上の調査をしてきているので、撮影はスムーズに進んだ。

南アフリカでは、アパルトヘイト崩壊後の都市生活の変化というテーマで、ケープタウンのカエリチャ地区における掘っ建て小屋の生活を撮影した。近年、ケープタウンの郊外では掘っ建て小屋が急速に増えており、そこに暮らす人々の生きざまとしてのコーサ人の都市への文化的適応を描くことを試みた。都市部での撮影では、筆者がこれまで親しくしてきた人々以外も含まれるために、取材拒否を予想したが、意外と少なかった。

以上のような2つの地域での映像取材は、南部アフリカの農村と都市生活の2つの側面に対応しており、また、グローバル化が進むなかでのアフリカ社会の変化を顕著に示そうとした試みである。

3. 展示

収集した材料をもとに行われる展示は、みんなくでの研究成果の公表の場であるといわれる。このため、展示内容をとおして、各々の企画者の研究水準が問われることになる。しかも、その成果を一般の来館者に伝えるためには、それなりの展示技術が伴っていないとまらない。

アフリカの常設展示は、みんなくのアフリカ展示の顔である。開館当時、それはアフリカの民族文化の展示として、わが国では最初の試みであった(端, 1984)。しかし、20年前に作られたものが現在まであまり変更されずに残っているために、過去20年にわたって急速に変化してきたアフリカに対応しなくなっている。また、展示されている物に関わる情報が少なく、ビデオテープが展示場にはないこと、その内容が対応していないことなどから不満の声も多いと聞く。このため、筆者が関わった新着展示と特別展示では、現代のアフリカを来館者に伝えることを目的として、物の展示とビデオの紹介とを併用すると同時に、来館者が企画に参加できるような仕掛けをつくった(写真1)。

まず新着展示は、展示担当の初心者にとっては絶好の機会を提供してくれる。これには、展示のために4つのガラスケースしかないので、テーマをしばりやすくなっている。筆者の場合、南

部アフリカのビーズ細工に焦点をしばり、ガラス、鉄、その他のビーズ素材の違いから展示を構成した。これをとおして、物の美しさに秘められた人々の知恵を主張したかった。しかし、どの程度、それが来館者に伝わったのかは疑問に残っている。この際には、ダチョウの卵に触れたり鉄ビーズの重さを確認できるコーナーを作ると同時に、ドイツ製の既存の映像でビーズの作り方を紹介した。これらの成果の一部は、常設展示のなかに移されており、いつでも来館者が見られるような状態になっている。

特別展示では、越境する民族文化というメインテーマのもとで、主張する先住民文化というコンセプトの中で、カラハリ砂漠のアーティストのコーナーを担当した。ここでは、絵画を描くペインター、ダンサー、ミュージシャンの3つのアーティストの生きざまを、物の展示とビデオ映像を併用して表現している（池谷、1999）。これらは、近年の周辺地域へのグローバル化の浸透の産物であり、展示場では、オーストラリアのアボリジナル、カナダのイヌイット、アマゾンのインディオのそれとの比較がなされている。しかし、こうした企画者のねらいとは裏腹に、家族連れを中心として、実際に音を鳴らすことのできる親指ピアノのコーナーに人気が集まった。国内各地から、親指ピアノの演奏者が集まってきた点も、展示する前には予期しなかった点として挙げられる。

以上のように2つの展示製作の経験をとおして、展示をつくる過程で学習することが多いこと、展示をする以前に、それに関わる論文を書き終えていることが望ましいことなどが明らかになってきた。つまり、展示のなかでの製作者のアフリカへのまなざしが問われるからである。

4. 社会への情報サービス

近年みんぱくでは、社会への新たな情報サービスが3つの形で試みられている。みんぱく電子ガイドは、1999年5月からスタートしている。これは、常設展示場にて小型スクリーンを持ちヘッドホーンをつけ展示物の前方で止まると、静止画像、動画、および文字と音を使って、その物の解説が聞けるようになっている装置である。これは、展示場での物の説明不足を補う試みである。

新ビデオテークは、本年3月16日から公開されている。このなかには、館独自の映像取材による新しいビデオと同時に、マルチメディアを活用した新たなビデオが含まれている。これは、視聴者のさまざまなニーズに応じて、好みのボタンを押すことで、より効率的に映像を視聴できる。

みんぱくが収集してきた物に関わる情報の公開は、現在、その知的所有権を含めて検討が進められているために、実現されてはいない。おそらく近い将来には、インターネットを通じて外部から自由に情報を入手できるようになるであろう。また、みんぱくとイギリスの大英博物館、そしてアメリカのスミソニアン自然史博物館の間において、博物館情報の交換を円滑に進める試みが進んでいる。この企画には、IBM社が中間に介在した共同プロジェクトが進められている。

以上のような動きは、社会へのみんぱくの研究活動の還元が求められている現在において、今後、ますます活発になるであろう。

5. 博物館活動の問題点と将来

これからのみんぱくでは、ますます展示や映像を通してアフリカのどんな面を伝えたいのかが問われてくるのではないだろうか。アフリカ研究者も驚くような新しいアフリカ観を作り出せるのかが問われている。現在、常設展示には、都市生活の展示がないことも、ますます都市化の進むアフリカにおいて、現実とは合わない時代遅れの展示になっているように思える。世界的にみると、シカゴの自然史博物館ではセネガルのダカールやナイジェリアのカノの生活を、ヨハネスブルクの博物館では南アフリカの都市の生活が紹介されている。

また、博物館活動の評価の問題が挙げられる。世界各地の博物館のアフリカ展示と比較して、展示内容や展示技法に独創性があるのかも問われる。そのためには、企画者が最先端の研究成果をとりあげて、それを展示に応用するような形でないと難しいであろう。展示やビデオなどの内容に対する、我が国のアフリカ研究者の率直な評価を必要としているのである。その一方で、一般に受け入れやすい評価基準は、来館者の数である。これを増やすためには、わかりやすさが要求され、人々が参加できるような企画がますます必要になっていくであろう。

近年では、社会における博物館の役割が変化してきている。博物館は、物を拝むようなテンプルとしてのものではなくて、フォーラムとしての博物館の役割が注目されている（吉田，1999）。例えば、今回の特別展示において親指ピアノを展示することは、それに関心のある国内の人々が集まる場を提供するという役割を果たしていた。そこでは、お互いの情報が交換される。今後のみんぱくは、アフリカ展示をとおして、アフリカ文化に関する情報を発信すると同時に、さまざまな社会のニーズに答えられる情報センターとしての役割を担う必要があると考えている。

参考文献

- 池谷和信，1999．カラハリ砂漠のアーティストーサンの絵画，親指ピアノ，ダンスー．中牧弘允
編：越境する民族文化．千里文化財団．50-55頁．
- 国立民族学博物館編，1998．国立民族学博物館展示案内上，下．国立民族学博物館．
- 端 信行，1984．アフリカ展示．国立民族学博物館編：国立民族学博物館10年史．国立民族学
博物館．
- 端 信行，吉田憲司編，1990．赤道アフリカの仮面．国立民族学博物館．
- 吉田憲司，1999．文化の発見．岩波書店．

〔みんなくの博物館活動に関する成果の一覧〕（筆者 作成）

資料1：展示（各展示ごとに、年代順に列挙）

- ・常設展示：アフリカ（1977年秋～42000年1月，和田正平，端信行，江口一久，福井勝義など）
- ・企画展示：赤道アフリカの仮面（1990年3月～5月，端信行，吉田憲司）
- ・特別展示：異文化へのまなざし（1997年9月～1998年1月，吉田憲司，栗本英世など）
越境する民族文化：カラハリ砂漠のアーティストのコーナー（1999年9月～2000年1月，池谷和信）
- ・新着展示：西アフリカの彫刻（1979年11月～1980年5月，端信行）
西アフリカの織物（1984年5月～11月，江口一久）
上ナイルの牧畜民—ナーリムのくらし—（1990年5月～11月，福井勝義）
エチオピアの高地と低地（1992年2月～8月，福井勝義）
赤道アフリカの儀礼的貨幣（1995年3月～9月，端信行）
ビーズ—美しさに秘められた南部アフリカの知恵—（1997年8月～1998年2月，池谷和信）
- ・開館20周年記念展示：ティンガティンガの不思議な世界—サバンナの現代絵画—（1998年3月～4月，和田正平）

資料2：ビデオテープ（これらの一部は、すでにみんなくのミュージアムショップにおいて販売されている）（監修者，国名，撮影時期）

- ・バメッシングの土器づくり（和田正平・森淳，カメルーン，1978年12月）
- ・満たされた器（小川了，セネガル，1981年10月）
- ・サハラ鉄づくり—ハウサ族のタマー（大森康宏，ニジェール，1981年11月）
- ・ダバンゴの酒づくり（和田正平・森淳，トーゴ，1982年12月）
- ・タンチグの型を使った土器づくり（和田正平・森淳，トーゴ，1982年12月）
- ・デファレの土器づくり（和田正平・森淳，トーゴ，1982年12月）
- ・アフリカ最西端の町 ダカール（小川了，セネガル，1984年12月）
- ・フルベ族 乾季の生活（小川了，セネガル，1984年12月）
- ・フルベ族 村の生活（小川了，セネガル，1984年12月）
- ・フルベ族の家畜と水（小川了，セネガル，1984年12月）
- ・マルアの町—北カメルーン—（江口一久，カメルーン，1985年1月）
- ・ボゴの王さま—北カメルーン—（江口一久，カメルーン，1985年1月）
- ・北カメルーンの花嫁（江口一久，カメルーン，1985年1月）

- ・マサイ族 上級戦士になる儀礼 (和田正平・神戸俊平, ケニア)
- ・マサイ族の豊産儀礼 (和田正平・神戸俊平, ケニア)
- ・アフリカ最南端の都市・ケープタウン (池谷和信, 南アフリカ, 1999年3月)
- ・ケープタウンのスラムの一日 (池谷和信, 南アフリカ, 1999年3月)
- ・掘っ建て小屋に暮らす—ケープタウンのスラムから— (池谷和信, 南アフリカ, 1999年3月)
- ・カラハリ砂漠のキャンプの一日 (池谷和信, ボツワナ, 1999年2月)
- ・カラハリ砂漠の家作り (池谷和信, ボツワナ, 1999年2月)
- ・最後の毒矢狩猟 (池谷和信, ボツワナ, 1999年2月)
- ・砂漠の水瓶スイカ (池谷和信, ボツワナ, 1999年2月)
- ・ヤギと人との共生 (池谷和信, ボツワナ, 1999年2月)
- ・アフリカの親指ピアノ (池谷和信, ボツワナ, 1999年2月)
- ・ドクターとトランスダンス—カラハリ砂漠の伝統治療— (池谷和信, ボツワナ, 1999年2月)
- ・砂漠の中の新興住宅地 (池谷和信, ボツワナ, 1999年2月)
- ・Making Iron in the Desert-The Iron Billets of the Hausa Tribe- (ニジェール, 大森康宏)
- ・Chief Buuba of Bogo Village-Northern Cameroon- (カメルーン, 江口一久)

新ビデオテーク：マルチメディアコンテンツ

カラハリ砂漠の狩猟牧畜民サン (池谷和信, ボツワナ)